コーチ養成におけるスポーツ危機管理の在り方に関する研究

関口 遵（コーチング系）、**野井 真吾**（教育福祉系）、**小林 正利**（健康医療系）、**尾川 翔大**（スポーツ危機管理研究所）

2020年度は、前年度から引き続き、スポーツ危機管理をスポーツの現場で実施するコーチの身体に着目して、研究を進めた。研究プロジェクトチーム内では8月、10月、11月、12月の計四回の打ち合わせを実施した。今年度議論した内容を基に、次年度、学会誌への投稿を目指している。

その内容としては、近年のコーチ教育において、理論知と合わせて実践知の重要性、構成主義的な学びを中心としたコーチの学びの理解などが展開されている一方で、コーチの身体知の獲得、あるいは、身体性の回復や育成に関する議論がなされていないことを指摘した。

2015年の日本体育学会で組織された体罰・暴力根絶特別委員会の議論の一つとして、坂本（2015）は、スポーツが有する身体文化として体罰や暴力が内在されている可能性を指摘した。身体的な負荷の伴うハードなトレーニングが行われ、競技スポーツの中で育まれた強い身体を美徳とする文化があり、その中で培われた身体が自己の身体や他者の身体に対する感受性を失わせているという。もちろん、個々の体験や経験は異なるが、コーチの多くがその文化の中で育ち、スポーツ指導の現場で再生産がされていることは容易に推察できる。この点から、コーチの養成においてもコーチを志望する者が競技スポーツをすること以外に身体と向き合う機会を作り、失った感受性を取り戻す必要性があるだろう。

また、コーチの身体を議論する上で、樋口ら（2017）の身体知の三次元、すなわち、運動的認識の次元、身体の学びを通した自己や他者理解の次元、暗黙知の次元を基盤に検討した。これまでのコーチ教育・育成では理論知の教授と獲得が重視されてきた背景があるが、それはあくまでもこの身体知の上に成り立つものであり、身体知の影響を避けることはできない。また、坂本が指摘する身体文化の影響は暗黙知的に存在することが考えられ、理論知の獲得のみでは解決されるとは考え難い。スポーツ危機管理の関連からスポーツ環境における体罰や暴力の排除が叫ばれる中、近年の我が国のスポーツ指導者資格の改定では諸外国の知見やアクティブラーニングが採用されるなど大きな変革が起きている。その中では、コーチの学びの質を高め、コーチング行動の習得や変容を目指し、実践知の獲得することが検討されてきている。こういった取り組みをより加速させるためには、コーチの身体に着目したコーチ養成の概念や手法を検討することが必要なのではと考えた。

その他にもコーチの身体性は、他者との関係性構築や練習・試合・チームやクラブの運営における意思決定において非常に重要になり、積極的に育成する必要があるだろう。

研究プロジェクト３では、上記のような議論を基に、執筆を進めた。年度内の投稿はできなかったが、次年度以降に学会誌に投稿を予定している。

引用文献

坂本拓弥（2015）体罰・暴力容認の一つの背景とその変容可能性、体育学研究、60（Report）、R3_1-R3_8

樋口聡、王水泉、釜崎太（2017）教育における身体知研究序説、創文企画

（受理日：2021年7月10日）